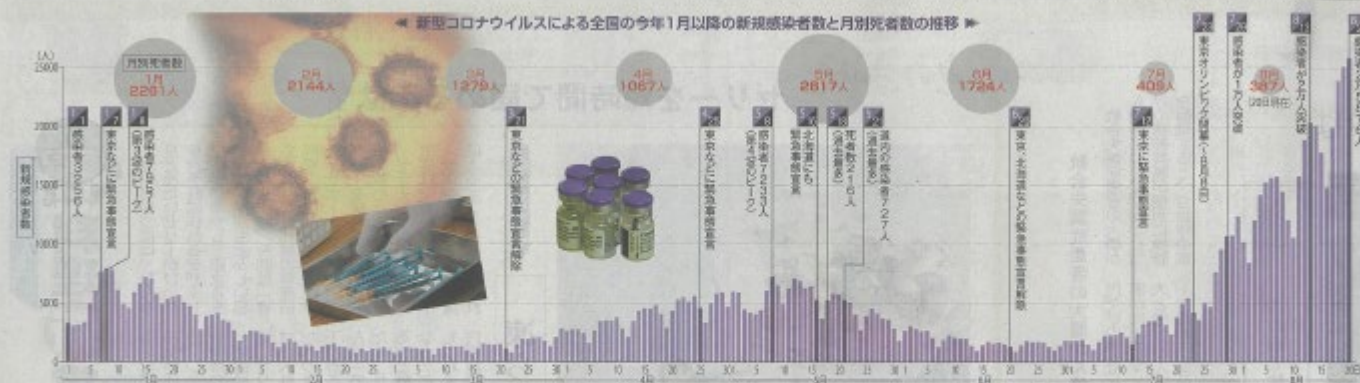




感染第5波 乗り越えるには

現状と展望 専門家に聞く

新王ロナウイス・スルタンが、猛威をふるっている。全国的な騒動は、金
融恐慌である。日本たりの新規株式募集は東京部内だけで一十人を要し、東
で三万人に迫るといわれている。現状から見ると、今後幾つもの国難がある。私た
ちはどう向き合ふべきなのか。東大のみなさんは昨年12月と今年一月にそ
れぞれインタビニを掲載した。東大名誉教授の内一也さん(67)が答へた。
熱帯病研究所教授の「木太郎さん57」にあててオランダ語を聞いた。

(聞き手：福澤幸典 訳：五十)

ワクチン接種切り札に

東大名譽教授 山内一也さん



やまのつち・かずや 1931年津和野川生まれ。東大農学部獣医系畜産学専攻。国立宇都宮研究所(現・国立畜産研究所)畜産、東大農学研究部熱帯技術専攻を修了。農研「ウイルス」卒。「ウイルスの意味論」「ウイルスの世紀」「ウイルスと人間」など著書多数。

[illegible]

す。日本で、それでは危険視をされた高橋君の持病や車座症、死に苦戦がうかがってつづいていました。

→ 弟は高橋はワクチン未接種の幼代や50代の感染と重篤化が目立っています。接種の遅れについてはどう思いますか。

「欧米では昨年12月に接種が始まったのに、日本政府は慎重に安全性を調査しました。欧米では4万人の臨床試験を終えて緊急使用が許可されました。なぜその時に日本は始められなかったのか、私は非常に疑問だと思っています」

→ もう一回接種を開始すべきだったと。

「もちろん安全性の確認をおろそかにしてはいけません。しかし、そのために日本は全面拒否したのは80人臨床試験だけで済みます。偏見のないアフリカやぶぐりでしかない、誰がどう決断するのかわからない、自分から決断しない責任を持つ、約800万人

の体は、一年以上は休んでおられる状態ではない。新たな活動もはまた出てくる。封鎖は今回で終わらない。緊急事態は、さきとて同様に、中長期のペース（？）と聞かぬ、もっとも安心しきれないなどといふことだ。

→東京ではさらに波に影響したのでどうか。

「当該影響は、すでに、これらも後、専門家がきちんとは検証するべき。」「ワクチンの普及と感染は収束に向かいますか。」

「徐々に収束してはいないし、よがら、今後ワクチンを行く確率がないといえないかも知れません。インフルエンザは毎年流行する型を予想しワクチンを準備する。新型コロナも同じように、変異種に対応したワクチンの接種が毎年定期的な可能性が有ります。ただ、将来的には新型コロナウィルスも可能性は低い、通常の風邪のようになって人と共存するようになるでしょう。」

「それか。」

治療薬開発、普及が大事

長崎大熱帯医学研究所教授 **山本太郎さん**



やまもと・なつみ 1964年、広島県生まれ。長崎大医学部卒。長崎大と東大で博士。アフリカやハイチで感染症対策に従事。京大助教授。外務省勤務を経て2007年から現職。著書に「感染症と文明」「疫病と人類」など。国立感染症研究所で勤務した。

[illegible][illegible][illegible]